

こだま通信

70号



【編集】 特定非営利活動法人こだま

〒690-0048 松江市西嫁島1-1-19

☎&FAX 0852-28-8162

8月の終わり、3回目となる実践報告会を松江市内の4事業所と一緒にこないました。これまではこだまの職員たちに日頃の取り組みを発表してもらっていましたが、今回は若い職員たちや他の事業所の職員に向けて、NPOこだまの17年間の実践の中で見えてきたことを発表させてもらうことにしました。

NPOこだまが目指してきたこと・・・

17年前といえば障がい者施策の中で大転換となった支援費制度が始まった年です。支援費制度はそれまでの行政による措置制度から、利用者が事業者と対等の立場で契約に基づいて障がい者サービスを使うという制度。ところが制度はできても、実際に利用できる事業所は限られている状況だったのです。

そこで「利用者の方が事業所を選ぶことができる状況を作ろう」と、NPOこだまを設立し障がい者サービスを始めることにしました。事業形態や定員などは“利用者を中心に”を常に考え、柔軟に対応できる事業所として運営する方向で進めてきました。

最近のこだま利用希望者の傾向は・・・

こだまは事業の種類や定員に柔軟に対応してきています。建物が手狭になれば新しい物件を探して増やしていったり、利用者が多くなれば定員を増やしたり、新たな事業所を開設して対応しています。それでもいつも定員はいっぱいの状況です。そんな中でも「こだまに通わせたい、利用したい」と相談に来てくださる方が多くあります。見学の時に相談者の方々の色々な話を聞くとつい『大丈夫ですよ』と言葉が出てしまいます。話の内容は「もっと今の時期に体験を増やしてあげたい」とか「利用していた事業所に通えなくなってしまって、ずっと家にいるようになりました」など。こだまは街の中のバスや電車ですぐ乗れる場所にあります。活動も狭い部屋から飛びだして、バスに乗ったり、体育館で体力づくりをしたり、ショッピングに出かけたりと多彩な活動を展開しています。そんな場所や活動が人気なのかもしれません。

こだまの魔力は・・・

そんなこだまに寄せられる期待に応えようとするこだまの“魔力”を紹介します。

一つ目は、利用者・家族の方を優しく包んであげる魔力。こだまの職員は一人ひとりの力は小さいのに、チームになると暖かいく優しい雰囲気でも包み込む大きな力を出すことができます。

二つ目は、そっと静かに見守る魔力です。せかすことなく利用者の方たちのペースを大切にしながらそっと訴えが出るのを待っています。そんな姿勢から安心感が得られるのでしょうか。

三つ目は、小さな集団での活動で一人ひとりの要望や、ニーズに応えやすい魔力があること。「映画に行きたい」「美保関灯台に行きたい」と希望があれば、来週の計画に反映させすぐに実現できるようにします。

四つ目は、困ったとき、こだまに相談すればなんとかなる魔力です。以前からこだまは保護者の方から相談をよく受けることが多い事業所でした。こだまは契約者の方を大切にします。利用者や家族の方に喜んでいただける行事を計画したり、時には仮装して驚かせたりする企画まで登場します。そんな雰囲気が相談しやすい雰囲気を作っているのかもしれないね・・・。

これからの事業所の方向は・・・

17年間のこだまの取り組みと最近の利用者の方たちから求められていることなどを考えると、これからの障がい者サービス事業所には次のような方向が求められていると思います。

- (1) 街の中のコンビニのような事業所。街のどこにもあって、利用しやすく、サービスがなんでも揃っている事業所。
- (2) どんな方でも利用できる事業所。障がいに捉われず、希望すれば通える事業所。一人ひとりに配慮できる事業所。
- (3) 利用者のライフサイクルに合わせて、柔軟に対応できる事業所。要望に合わせて対応していける事業所。

障がい者の施策が大きく変わり、サービス事業所に求められているものも変わってきています。利用者が真に求めるサービスのあり方を、追求していかないといけなくなってきているように思います。これからの職員たちに大いに期待したいと思います。

【山田 久】

2019・5事業所実践報告会

8月24日（土曜日）の午後、松江駅に隣接する松江テルサの大会議室にて5事業所合同の実践報告会と映画「道草」の上映会をおこないました。合同の実践報告会は今年で3回目になります。当日は各事業所の職員や利用者さんと一緒にご家族の方も、さらには学校の先生にも足を運んでいただき、総勢約60名の方々に参加していただきました。本当にありがとうございました。



今回の報告会の目玉企画「道草」という映画は、東京都内でアパートや一軒家で自立生活を送る知的障がい者や行動障害のある方々とその周りを取り巻く環境、家族や事業所の職員との様子を、何気ない日常の生活を撮影して作られた作品です。観ていただいた方には様々な感想をいただくことができました。「新しい生活のスタイルを知ることができた」「当事者がしっかりと自分の人生を選択できるような環境が必要」「支援者とのやりとりや駆け引きが非常におもしろかった」等。

障がい者支援の制度や内容はしっかりと行政が定めていても実際には物理的な施設等の問題、各事業所の運営方法や市町村での対応の違いがあり、住む場所によっても受けることができるサービスは様々です。今回の上映会で実際の都市部での取り組みや生活の様子を知っていただきました。“街（地域）の中でいきいきと生活をするために新しいサービスの形や新しい生活のスタイルをみなさんと考えていきたい”と思います。

また実践報告会は放課後等デイサービス「ピピ」、放課後等デイサービス「JYO」、ショップみけねこ、ポレポレ、NPOこだまの5事業所合同で行いました。

今回からの参加となった放課後等デイサービス「JYO」は、昨年春から活動を開始した医療的ケアを必要とする子供たちが利用できる事業所です。子供たちがのびのびと毎日を楽しめるような職員体制の必要性、室内でも体を動かして楽しめるような工夫など実際の写真を使っての発表でした。医療的なケアが必要な方たちが利用できる場所が限られている中で、街の中で展開しているJYOさんには今後ますます期待が寄せられることと思います。

ポレポレからはお弁当作りに利用者の方が主体的に関わっていけるよう、一人ひとりの得意なことに視点をあて取り組んでいる様子などが分かりやすく伝えられました。新たにおにぎりマシーンも導入したとの情報もありました。販売もコンスタントに伸びているようで、ますます発展しているようです。

ショップみけねこからは、利用者の方を関係者が連携して支援していける状況作りがいかに大切かという報告がありました。特別支援学校を卒業してすぐに利用開始になった利用者が、色々な困難を抱え事業所だけの対応では限界があり、関係機関の連携はもちろん専門的な機関での相談が受けられるような体制づくりが必要との貴重な報告がありました。

こだまからは、17年間の事業所の運営を通じて培った不思議なこだまの魔力？の報告でした。街の中の便利な場所にあるからこそ、小さな集団での活動だからこそ生まれるこだまの魔力です。そしてこれから望まれる事業所の方向性について報告がありました。

また放課後等デイサービス「ピピ」は、ピピの現状についてのレポートによる報告でした。

今後も各事業所に対するご理解、ご支援をよろしくお願いいたします。

【永井 智】



映画「道草」をみて・・・

どちらかという友人や家族に近いような関係の支援者とともに自立生活を送っている利用者の方をみて、現在こだまを利用してくださっている方も、こんな生活が将来できたら素敵！と思いました。一緒にお風呂に入り、一緒に食事をする。支援者と利用者ではなく対等な関係を築いていて、お互いすごく楽しんでいる様子を感じることができました。利用者さんに対する支援者の言葉使いが、少し乱暴だったりしていましたが、愛情いっぱいでもそれもありかと思わせられました。

障がいのある方が自立した生活を送るためには、24時間その方を支える支援者が必要です。しかも一人、二人ではなく、たくさんの支援者の輪が必要になってきます。それには人員の確保が課題となります。私にしても、まだ子供が小さいこともあり宿泊となれば私を支えてくれる家族の協力が必要となり、一晩泊まることも大変です。しかし、子供を見てくれる人がいればいいわけで、発想の転換でどうにかかなりそうな気もしています。もっともっと大きな視野で考えていくことが必要ですね。

家族だったり支援者だったり、立場によって違いますが、この「道草」は私たち支援者に今後どうしていかなければいけないのか、これから何をしなければいけないのかを問いかけてきている映画だったような気がしています。



【森山 祐子】

率直な感想として、まず、このようなフラットな人間関係が築けていること、本人や周りの人々もこの生活が当たり前であることがすごく感じられ、羨ましく思いました。そして、支援者側の24時間の生活を支えることについて、人手不足等の課題をクリアし、その人らしく生きていくことを支えるには、どのような事業の展開があるのか、また、どのようにしたら実現していくことができるのかということにとっても興味をもちました。次に、代表の方がおっしゃっていた言葉、「うまくいかないのは付き合い方が足りないのだ」。まさにそうだと思います。ひとくちに「付き合い方」といっても、そもそも相手との感じ方が180°違うのかもしれないし、1歩進んだと思ったら、5歩さがる・・・。なんてことがよくあります。すぐにどうにかしたいと急いでしまうことが、自分の悪い癖だなあと考えさせられますが、自分が思っている以上に「待つこと」や「見守る」こと、ときに「導く」ことが大切なのではないかと思えます。その積み重ねが信頼関係に繋がっていくのではないのでしょうか。やっぱり人は人によって心が動かされるものなのだと

感じさせてもらえるそんな映画でした。一人暮らしがしたい人、仲間と一緒に暮らしたい人、家族とともに暮らしたい人、色んな形があるとは思いますが、「自分の人生を、どこでだれと」ということを、あたりまえに選択し実現できる世の中になればいいなと思っています。

【曳野 碧里】



映画の始まりは二人の男性が、6畳くらいの部屋にごろ寝をしている。おもむろに一人の男性がおきて、もう一人の男性に声かけをする。そして、台所に立ってコンロや、冷蔵庫を歩き来し朝食を作りながらもう一人の男性の朝の準備の手伝いをする。二人で朝食をとるも、自閉症らしき男性は独り言を言いながら落ち着かない様子で、冷蔵庫から何かを出して食べる。出勤する様子、自閉症らしき青年は何かブツブツいいながら、その辺のものを触ったり、行ったり来たりしながら歩く。もう一人の男性は寄り添って歩く。迎えのワゴン車に自閉症らしき青年は乗って施設に向かう。公園でブランコに乗ったり、散歩をする。時々大声で奇声をあげる。周りの人がびっくりするので介護者が注意するもすぐ同じことの繰り返し。まるでうちの子と私のやりとりと同じだ。自閉症と重度の知的障がいのある青年が介護付きで一人暮らしをしている映画だ。奇声をあげて自傷や他害、暴力的になる人の支援は大変だなと思った。それでも一人暮らしをする青年は自然体で穏やかに見える。そして支援する人が優しく寄り添う姿は感動する。

重度の知的障がいや行動障がいのある自閉症の人は入所施設か親元暮らしのが普通だと思っていただけにこんな生活もありなのだと思います。自分の子供の今後の生活の選択肢として、こういった支援ができる団体が松江にもできたらいいなと思いました。

【中村真理子】





今年も3回に分けて「こだま塾」を6月から行いました。今年のこだま塾は、今後のこだまを背負って立つ職員たちに、事業所運営のノウハウを伝える機会としました。1回目はこだまが大切にしてきたこと、2回目はこだまの事業所運営の方針など、3回目はこれからのこだまの事業所の展開は、というテーマでした。通常の業務が終わっての時間での開講ですので、集まれる職員はどうしても限られた方になってしまいますが、大事なところは職員会でも報告をしてきました。

これから自分たちが中心となって事業所を運営していくためのワークショップの時間も設け、今後の利用者の方の状況やニーズなどを把握し、事業所運営をしていくことの大切さを考えることができました。そして一年先、二年先のNPOこだまの事業展開についても、具体的に提案させていただきました。こだまには30代40代の頼もしい働き盛りの職員たちが多くいます。それぞれが持ち味を生かして、新しい挑戦的な仕事をしてくれることを期待しています。そんな職員になってもらえるように、今後もこだま塾は続けていきます。

こだま塾を終えて

NPOこだまでは、こだまが大切にしている理念や日々の実践の取り組みなどを職員たちに伝えてもらうために、時々こだま塾を開くことがあります。今年も『これからのこだまの事業運営をどうしていくのか』ということについて話がありました。

17年間、こだまが積み上げてきた事業運営のノウハウや、利用者支援の中で大切にしていること、大切にしていかなければならない考え方などの話がありました。常々伝えられていることなのですが、いざ自分たちが表に立ってやっていくとなると、はたしてどうなるのかな・・・と少し不安になってくることがあります。今回のこだま塾では、自分も含めて若い職員たちがもう後に引けないようなこれからの事業展開にも触れられました。事業運営をしていくためには信頼を得ることが大事だということも繰り返し伝えられました。これからも話し合いを続け、若い職員たちで魅力ある活動作りをしていこうと決意したところです。

【渡部 健史】

教員時代には、当たり前ですが研修の機会はたくさんあり、中には悉皆研修（全職員が必ず受けなければならない研修）もたくさんありました。児童生徒がいない時間はほとんど研修に費やしていました。それは、教員の質の向上、専門性の向上には欠かせない努めです。同じように、こだまでも、障がいのある方々と向き合い、質の高いサービスを提供しようとするれば、研修は必須です。しかし、学校と違うところは利用者さんのいない時間を、しかも職員が全員集まれる時間を作ることがとても難しいことです。それでも、夜の時間を使ってこだまは研修の機会を作っています。中でも、こだま塾は、今のこだまに必要な現状と課題に向き合い、NPOこだまのこれまでの経験から教え導かれる中身の濃い研修が展開されます。今年度は特に、これからのこだまがどう進んでいけば良いのかということがテーマでした。山田さんは常々、街の中にあるコンビニのように、小規模な事業所が街のあちこちにできていけば良いと伝えておられます。こだまがこの17年間で歩んでこられた実践をモデルにして、「利用者さんのニーズに応えていけるこだまになるために、やってやろうではないか！」と奮起して取り組む職員が育ってくれることを、私も大いに期待しながら話を聞きました。

【菅 道子】

アジ釣り

こだまの秋の活動といえば何を思い浮かべられるでしょうか？栗やむかご、銀杏、どんぐり、しいのみ、あけびなどの木の実拾い。落ち葉狩り、芋ほり、リンゴ狩りなど色々あります。中でもお盆が終わり少し涼しくなってくるとこだまは海に向かいます。海は最高です。目的はアジです。夏の終わりごろから釣れ始めます。しかし日中はまだまだ暑いですが、ススキが風に吹かれる時期になるとアジのサイズも大きくなり釣った時の感触も全然違ってきます。ゆえに9月の計画では各部所アジ釣りに出かけられます。サビキ釣りなので皆が釣りやすいうえに、9月に入ってからのアジは竿を揺らしてくれて感触もしっかりと楽しむことができます。あの感触が楽しいのです。「魚を釣ったよ」の感触。釣れた魚を見るみんなの表情。最高です。アジの他にも色々釣れてくれます。自分の地域ではくるやとかくろあいと呼ばれる黒い魚や、でんぼと言っているカワハギ、ボッカと言っているカサゴなどたくさんの魚が釣れてくれます。よめしまの方はけっこう上手に竿を持たれ釣られますが、ほんそごの方なども車いすから降りられ、竿を持ち釣りを楽しまれます。そして釣った魚をすぐに天ぷらなどにしていただくのも醍醐味かもしれません。自分の釣った釣りしなの魚をいただくのはこれまた別格なのです。毎年釣り対決を開催していますが、今年度はこだま全体での「各部所対抗釣り大会」を開催することになりました。みんなが同じ目標をもった活動ができることが楽しみです。

当日は天気にも恵まれますように。

【井川 樹】



2019年度 利用者検診が終わりました

まだ暑かった暑かった8月の初旬と下旬に分けて、利用者の皆さんの検診を石井クリニックさんの協力を得ておこないました。今回は32名の方が検診を受けられましたが、毎年のように行なっているので、初めの頃は注射や検査器具を怖がっていた利用者の方も、今年はみなさんととても上手に受けることができました。回数をこなしていくことの重要さを思い知らされる情景でした。

検診の結果も届きましたが、大きく異常のある方はいませんでした。服薬による肝機能の数値に少し異常のある方が多くみられましたが、どの方も経過観察でよいようです。

こだまを利用する方も年齢を重ねて、そろそろ成人病に気をつけないといけない時期に来ている方もおられますが、今回悪玉コレステロール値の高値による動脈硬化指数の上昇がみられる方もいました。各グループで必要な方への支援は行われているようですが、今後も継続して体を動かしていく必要があると思われます。結果については、個別にお知らせしますが何かご不明な点などありましたら、お問い合わせください。

NPOこだまでは、利用者の方も働く職員も定期健診を受けてもらっています。健康に生活していくためには、日頃から健康を意識した生活が大切になってきますので、みんなで健康意識を高めるような取り組みもしていきたいと思っています。

【古屋久美子】



生活介護こだま

生活介護3グループ

昨年度から取り組んできたラスク作りが本格的に稼働し始めて、早くも半年がたちます。今ではすっかりせ生活3の代名詞になったのではないかと思うラスクですが、ここに至るまでにはたくさんの努力がありました。何度も何度も失敗して、そのたびに試行錯誤を重ねて、様々な方のお力をお借りして、ようやく今のような納得のいく味にたどり着くことができました。夏に入ってからは新しくガーリック味のラスクも作り始めています。来月に開催予定の屋台村で、特製のクラムチャウダーと一緒にご提供する予定です。皆さまに美味しいと喜んでいただけるよう、心を込めて一枚一枚丁寧に作っています。どうぞ楽しみにしててください。

【細川 裕幸】

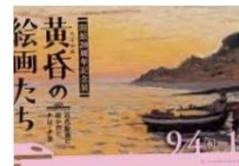


ほんそごグループ

こんにちは、ほんそごの永井です。暑い夏が終わり、いよいよ秋がすぐそこまで来ています。秋といえば美しい夕暮れです。すすきが風になびいていたり、トンボがとんでいたり、夕日のオレンジがより一層きれいに感じられて風情を感じますね。松江にはきれいな夕日スポットがたくさんあり、こだまの近くでも見るすることができます。また秋といえば芸術の秋ですね。県立美術館では世界中の夕日の絵画を集めた展示会が開催されています。というわけでさっそく開催翌日にほんそごのみなさんと足を運んでみました。会場は世界中の有名な画家の夕日を描いた絵でいっぱいでした。鑑賞に来たお客さんも真剣な眼差しで静かに一つ一つの絵を眺めておられました。ほんそごのみなさんも会場にはいった途端に静かに絵を見つめてゆっくりと鑑賞されていました。いつも眺めている地元の宍道湖に浮かぶ夕日と比べながらみなさん楽しまれていたのではないかと思います。11月の半ばに向けて少しずつ展示する絵が変わって夕日の企画展は続けられるそうです。

また足を運んでみたいと思います。

【永井 智】



はなみずきグループ

はなみずきにもやっとクーラーが2台になり、猛暑の今夏を何とかしのぐことができました。でも、そんな暑さも過ぎてしまえば束の間で、すっかり秋の気配になりました。

はなみずきの周りには散策にふさわしい場所がたくさんあります。柔らかい陽ざしが感じられる日には、予定を変更して出かけていきました。宍道湖岸、月照寺、千鳥公園、しじみ館で足湯・・・

時にはみんなで車に乗って外出もしました。テクノパークの風の丘公園も近くで、散策するにもちょうど良い距離なので、何回か出かけて気持ちの良い時間が過ごせています。また、一日企画としてお食事処で外食をしたり、おにぎり弁当をみんなで作ったり買ったりして、外で昼食をとるという企画も3回行いました。いつもはなみずきで食べていましたが、外で食べる経験も、利用者さんの様子がさらに知れて、充実した活動になっています。

10月下旬の城西祭りの出店に向けて、午前中は作業で大忙しですが、まだまだしばらく天候に恵まれる日々が続くので、昼からは陽ざしを求めて出かけていきたいです。

【菅 道子】



多機能型事業所よめしま

生活介護よめしま

夏が終わり、涼しい日が続いています。秋への移り変わりを感じることも多くなりましたが、今年度も半分が終わろうとしています。

4月からスタートした今年度の生活介護よめしまを振り返ると、少人数でのグループ単位の活動、体を動かす活動の継続、作業の効率性の向上などをテーマとし、日々の活動に取り組みました。

グループ単位での活動では、1つの活動の人数を減らすことにより、利用者の方と職員との関わりが以前より広がってきたと感じています。そのグループに合わせた活動も展開できるようになりました。

作業面では、これまでくろもじ茶の製造作業で積み上げてきたことを継続しつつ、利用者の方が新しい作業工程に取り組みたり、他の作業科目を続けていた方が初めて製造作業に取り組みたりしました。品質の向上や、販売の方法などについてはこれから更に検討していきたいと思います。

定期的に取り組んでいる運動では、ウォーキングが中心ですが場所を変えたり、選択できることが継続の要因の一つではないかと思っています。涼しくなり、外に出やすい季節となりました。今後はただ歩くだけでなく、実施できなかった運動もどんどん取り入れて健康維持を目標にしっかりと体を動かしたいと思っています。【安部裕紀大】

クッキー工房



「すごく美味しいです！プリン屋できますよ！！」と初めて作ったプリンが大好評でした。工房に新しいオーブンが来てから、ずっと作りたかったプリン。「今年の屋台村で販売ができればいいね」と職員で話し、クッキーの製造が落ち着いている週末に少しずつ製造するようになりました。プリンは卵をたくさん使います。利用者さんは楽しそうに卵を割り、リズムよく泡だて器で混ぜてくれます。バニラエッセンスの良い香りが漂う頃には「プリン、食べたいです！」と笑顔で話してくれます。試食の時には「うんっ！美味し〜い！！」と満面の笑みで、なめらかプリンを口へ運んでいきます。こだまの職員さん達からも好評で嬉しい言葉をたくさんかけて頂いています。「美味しい卵と牛乳を使うといいよ」等のアドバイスも頂きました。慣れない工程にあたふたし・・・少し時間がかかっていた初回に比べ、1番にやっておくこと、2番目に・・・と順番を決めました。そして大きなボウルやお玉といった必要な道具も揃えました。そのおかげで少しずつスムーズにプリンの製造ができるようになりました。屋台村でたくさんの皆さんに食べて頂けるように頑張って作ります。新しいオーブンを少し使いこなせるようになったクッキー工房は「次は何を作ってみようか？」とワクワクしながら試作を楽しんでいます。何かリクエストがありましたら教えて下さい。【三上 智加】



カフェこだま

9月の初めからカフェこだまでは、斐川町在住の石飛光さんの書道展をおこないました。光さんは小学生の時に書道に出会い、書道教室に通いながらメキメキと上達し書道教室の先生にも認められ金沢翔子さんのような大迫力の力強い作品が特徴です。

今回、光さんも個展ははじめてということでしたが、連日カフェのお客さんからも賞賛の声をいただきました。感想を書いていただくノートには、これまでにないほどの感想が寄せられ、光さんもお家族の方もとても喜んでいただきました。小さなカフェですが、こういった形で、作品の発表の場にもなっていけることはとても嬉しく思っています。またご利用ください。



【山田 久】

ホームヘルプサービス

今年も暑い暑い夏がもう終わりをつげ、早くも秋に向かって準備が始まりますね。ところが今年は9月の終わりという

のにまだまだ暑い日が続きます。地球温暖化の影響でしょうか・・・。

こだまヘルプの移動支援は夏でも外出先で色々な体験をしています。しかし外はカンカン照り、すると利用者さんから「今日は暑いから、カフェに行きませんか」と言ってきました。移動支援をしているとこんな変化があります。利用者さん本人さんから「ここに行きたい、またあそこに行きたい」の要望です。そんな要望があれば、直ぐに実現するのがこだまの移動支援です。すると自分の希望がなかったと、家でとても喜んでいたという報告を受けたりします。

担当ヘルパーに慣れて安心してくださったというのがありますが、移動支援の利用回数が増えると利用者さんのみなさんが、次はどんな楽しみがあるのかな？と期待をもってくれているように感じます。週に一度ボーリングを楽しみにしておられる利用者さんも

「ボーリング、行きたいです」と伝えてくださいます。様々な場所へ行き、体験をして一緒にたくさん笑顔を共有ができるように秋から冬に向けて頑張りますね。

【安達 和登】



大西看護師の健康講座

秋の夜長といえど・・・

秋といえば...食欲、行楽、収穫など様々なキーワードが浮かんできますが、今日はその中のひとつ、読書について取り上げたいと思います。最近わたしが読んだ絵本の一冊に、ヨシタケシンスケさんの「みえるとかみえないとか」があります。少し話題になりましたから、ご存知の方もいらっしゃるのでしょうか？

あらすじとしては、宇宙飛行士の「ぼく」がいろいろな星の調査をしているのですが、ある星に着陸した「ぼく」は、その星に住んでいる宇宙人に遭遇します。この星の人たちは目が“みつつ”あって、前も後ろもいっぺんに見えるみたい。ところが三つ目の人たちからすると、目が“ふたつ”しかない「ぼく」におどろくのです。「うしろがみえないの?」「ふべんじゃない?かわいそう」と言われてしまいます。見え方がちがうだけなのに、気を使われた「ぼく」は変な気持ちになります。さらにその星を調べていくと、生まれつき「後ろの目だけ見えない」人と出会い、「ぼく」はほっとするのですが...

自分がみている世界を、ほかの人がみたら違うように見えるのかもしれない?自分が持っているものを持っていない人がいたらかわいそうだと思う?この本を読んでいて、あたまがごちゃごちゃになりながら、楽しくなっていく自分もいました。

相手の「ふつつ」を知り、そうかそうかと思えたら、みんなが楽しくなれるかもしれないなあ...もしかしたら、娘に「聞こえる世界もたいへんねえ(やや上から)」と言われたりなんかしちゃったりして～などと想像する時間はキラキラしたものでした。

いつもと違う世界にトリップするのも楽しいですよ。

ぜひ、この秋の夜長。お好きな本を手元に置いて、

こころやからだをほぐしてみたいはいかがでしょう? 【大西 知子】

